校長研修だより２６７

ICT が普及する前の黒板の役割

２０２６・１１・１１　重枝 一郎

前号で「ノート」の話をした。今号は，ICT 導入前の黒板とノートの役割について書く。

私たち教師は，自身が受けてきた授業での黒板・ノートの役割を踏襲しているケースが多い。教師は板書しながら説明し，生徒はそれをノートに写すとともに，余裕があればテストに出そうな教師のコメントをメモする。教師は，大多数の生徒が板書を写したタイミングで次の説明をする。教師は，「みんなよく授業を頑張った」となっていた。

最上位の目的は，自律的学習者である。主体的で協働的な学びをするという最上位の目的をはっきりさせて，そこから板書やノートの役割を考えることが大切である。今は，ICT が普及して，授業戦術は上がっているといえる。戦術が身に付いたら次は戦略が必要になる。そしてその上に目的がくる。そこは，ICT が普及する前と同じなのであるが，板書やノートの役割をきちんと理解していないと，ICT という新しい戦術・戦略は絵に描いた餅ということになる。

ICT が普及する前の黒板の役割は３つあった。

１つ目は，「記録として生徒がノートに写すべきことを伝える」という役割である。教師の工夫としては，丁寧でわかりやすい板書をするということ。当然，それが毎回の授業のまとめとなり，復習やテスト勉強の貴重な材料となる。ただ，そのノート作りができているからといって必ずしもテストで得点できるかどうかわからないということもわかっていた。

２つ目は，「メラビアンの法則に基づく視覚効果」という役割である。メラビアンの法則では，聴覚情報は 38%で，視覚情報は 55%である。教師が黒板にキーワードや図表を書くことで伝わりやすくなる。また，できるだけ 1 コマの授業で板書を消さないよう指導されていた。ただ，教師の板書の表現力によって差が生まれていた。

３ つ目は，「教室内の一体感を生み，集中力を引き出す」という役割である。教師が前で板書しながら説明することでライブ的な一体感が生まれる。また，生徒とのやり取りで，教師は安心感をもてる。ただし，あくまでも教師の安心感であり，テストで得点できるとは限らないケースも多い。

では，ICT の普及でこれらの３つの役割はどう変わったのだろう。

１つ目は，教師が黒板に書く時間，生徒がノートに写す時間の削減になった。ただ，ICT 普及後の今は，板書はいいとして，生徒の書く活動の必要性は再認識されている。

２つ目は，視覚効果を活用しやすくなった。

３つ目は，興味を引くコンテンツを見せると，教師の指示の徹底が甘くても，生徒が前を向くようになった。　　このような声が一般的である。

ただ，私としては ICT をツールとして活用できたとしても，それ以前の板書やノート時代の教師のスキルの上に，その活用があってほしいと思っている。以下の３つの力を持っているかどうか確認してほしい。

① **目の前で起きていることに集中させる力。**　フリーズコーチング（活動を止めて話をする）なのか，シンクロコーチング（活動させながら話をする）なのかを考えて，生徒の集中力と理解度を高めようとしているか。
② **発問力。**　生徒が当事者意識を高めるような発問をすることができているか。
③ **伝える力。**　話を短時間で，内容を簡潔に伝えることができているか。キーワードにする力や話の内容を明確化することができているか。